

「これ番頭どん、お前片手で算^ずんで居るよつてに九本しか無いのや、兩手を算^ずんで見いな。」

「へエ、一本、二本、三本、四本、五本、六本、七本、八本、九本、十本、ほんに有た有た。」

「無うてかいな。これ番頭どん、こんな物を持つて居る様な者は片時として置いておく譯にいかん。早速斷りを云ふとくれ。」

「そらいきまへん、こんな物を持つて居る者をうかつに斷り云ふたら、私しの咽喉笛へ喰ひ附かれます。まこと、これを斷り云ふ様な事なら近々に別家をさして頂く身體でおますが、一トまづ親元へ歸らして頂きます。」

「其所を何とか……。いざと成つたら皆の者に獲物を持たして加勢をさすよつてに。」

「それは、御主人のおつしやる事でござりますよつてに、是非もござりません。それでは成可く大勢で御加勢をお頼み申します。」

「それでは元々に仕て置いて。」

荷物を元の様に致しまして、夜分芝居から歸つて來るのを待つて居ると、何も知らずに戻つて參りました。

「アノ鍋どん〜」

「ハイ、番頭さん、なにか用事かな。」

「ウム一寸お前に話のしたい事が有るのや。もう用事は済んだかいナ」

「ハイもう用事は片附いたが。」

「そうか、それは丁度幸ひや、こつちへ遣入つとくれ、後を締めといて、アー一寸こつちが開いてるピシヤツと、そう〜もつと前へ寄り、蒲團を敷き、女は冷へるといかん、他^{ほか}でもないが、お前に私が折入て頼みが有るのや、私しの頼みや、ウンと云ふて聞いてや。」

「ハイ番頭さん、わし其頼み知つておるでう。」

「エ、お前、アノ頼みを知つてるか。」

「ハイ、わし來た時は、何ぢや怪態^{みょうたう}な人ぢやと思ふて居たが、交際^{つぎあひ}ふて見ると、お前、なか〜親切な人ぢやで、聞けばお前、近々別家をするそうぢやが、妾^{めかけ}しもまだこれといふ夫もないで、お前さんの事なら、わし、どうでもするでう。番頭さん、わし、どうでもするでう。」

「ア、違ふ〜、そんな陽氣な事やない。實はこうや、當家の御寮人に一人お妹^{めかけ}が有るのや。それが今度、鳥渡譯が有てお嫁入先から、お歸りになるのや。それについて此處の御寮人の妹てな扱ひをしられるのが、氣兼ねで辛い。女中替りに使ふて貰ひ度いと斯ふ仰有る、そうすると女中が一人不用になるや。そこでお妹^{めかけ}の話が附くまで、お前、國へ去んでんか。こつちの話が附いたら、また元の通りお前に來て貰ふよつてに。私の頼みや。諾^{うん}と云ふてんか。わかつてるか。諾^{うん}と云